

幼少年期イエスの教育について —外典「幼時福音書」の分析—

安川 哲夫*

はじめに

1508年にチューリッヒで出版されたカレンダーの扉には、後光を付けた聖母マリアがイエスを連れて教場に入っている姿が描かれている(図1¹⁾)。イエスはこの時代の図像では一般に見られるホーンブックを手にしていないけれども、これが入学の様子を描いたものであることは明らかである。図の上のドイツ語の説明文にはマリアの言葉が記されていて、その最初の二行には、「私はこれまでわが子を立派に育ててきた。喜んでこの子を学校に行かせようと思う」と書かれている。次の二行でマリアは教師にわが子を誠実に教えてくれるように頼み、そして最後に、イエスに喜んで愛を教え、彼のために最善を尽くそう、と教育意志の継続を表明する。

この銘を重ね合わせて図を読むと、マリア、イエス、教師の各ポジションにも意味があることが分かってくる。左手に書物を持つマリアは、これまでのイエスの教育が聖書に基づいたものであり、自分がその責

Ich han min kind erzogen zart vnd schon
Vnd wolt es gern zu schül lassen gon
Vnd bit lich durch got vnd ete
Das ir min kind erlich wölent lere
Liebe frau ich wil es gern lere
Vnd min bestes zu im lere



図1 イエスの入学
(1508年のカレンダー)

* 教育基礎学専攻 教授

任者であったことを主張している。イエスは世俗的な学問を学ぶのに何のためらいも示さず、むしろ自ら教師の前に進み出て、「これからよろしくお願いします」とばかりに手を差し出している。鞭をもった教師がこれに応じて同じく手を出しているが、両者のこのポーズは中世では「教師としてのソロモン」を描いた図像でしばしば見られた。16世紀初頭の図は、上述の三者に加えてさらに二人の生徒を描き込むことで——異なったテキストを手にする生徒たちは、授業が能力レベルに応じた教科書に基づいて進められることを示唆している——学校教育にリアリティをもたせている。この図は差し当たり文字の読めない親たちに対して教育の必要性を説く手段として利用されただろうし、また家庭内にあっては親が子に、「ほら見てご覧なさい。イエス様だって学校に行かれたでしょう」と勉強の大切さを説いていたかもしれない。

聖書正典には言及は一切なかったけれども、幼少年期のイエスの行状を記した外典『トマスの幼時福音書』(The Infancy Gospel of Thomas)を介して、中世の人々はナザレのイエスは学校に通ったと信じていた。事情は聖母マリアに関しても同じで、一般に彼女は3歳から14歳まで神殿で生活していたことになっているが(たとえば、ヤコブス・デ・ヴォラギネの『黄金伝説』)、13世紀初めに制作されたシャルトル大聖堂のステンドグラス「聖母マリアの生涯の窓」には、両親に引率されて入学するマリアと、彼女が他の4人の生徒たちと一緒にベンチに腰掛け、鞭をもった教師から授業を受けている様子を描いた二場面がある。

イエスやマリアを使って学校教育を肯定的に描くこうした図像は、しかしながら、中世では概してまれであった。というのも、『トマスの幼時福音書』では幾人もの学校教師がイエスにアルファベットを教えようとしたけれども、その試みはことごとく拒否され、そして、あろうことかその内の一人は彼に呪い殺されていたからである。幼児イエスは反教育・反学校のチャンピオンであった。中世のこうした教育イメージと、イエスを範例として学校教育の重要性を強調する16世紀初頭のカレンダー図像との間には、実に大きな開きがある。この開きはいつ頃、いかにして埋められていったのだろうか。このプロセスの解明が、本研究の第一義的な課題である。

ところで、上述の変化には、これまで子どもの教育に重要な決定権を有してい

た父親が後退し、代わって母親がその役割を担うという教育主体のシフト変化が伴っていた。幼時福音書では、イエスを学校に連れて行ったのは、当初は父親一人だけであったが、やがてこれに母親が加わり、両親が入学光景に出現する。だが、13世紀末から14世紀にかけて、マリアが一人でイエスの手を引いていく通学が独立したモチーフとして描かれ始める²⁾。これは母親の教育役割の増大を示唆しているが、この新しい時代の精神は、14世紀ころから図像、彫刻、ステンドグラス等に、娘マリアに読み書きを教える聖アンナ³⁾、書をもつ聖母、イエスに聖書を読んで聞かせる聖母⁴⁾といった主題を好んで採用し、そして14世紀末から16世紀にかけては、北ヨーロッパを起点として、幼子イエスがマリアの膝の上でペンを持ってパーチメントないし本に筆記し、マリアがインク壺を持つ聖母子像を広めていく⁵⁾。本研究は中世後期から顕著になり始めたこうした変化も射程に入れて進められるが、本稿ではとくに『トマスの幼時福音書』とその伝統を対象に、イエスの教育イメージの変化を明らかにすることを主たる課題としている。

この種の研究には言語上および文献上に多大の困難が横たわっている。にもかかわらず、この分野の研究はここ十数年の間に著しく進展しており、幸いなことに、他分野の研究者の接近を可能にしてくれている。ちなみに、筆者が参照・利用している古典語およびヨーロッパ諸言語で書かれた幼時福音書のテキストは、すべて英語訳である⁶⁾。かかる語学上のハンディを負いながらも、近年の研究成果をできる限り取り込みながら、これまであまり学問的な注意を向けてこられなかった幼児イエスの教育イメージを分析する参照枠と問題群を整理し、西洋の文化と教育の形成要素に関する理解を深めることも、本稿の課題のひとつとなっている。なお、欧米での幼時福音書に対する関心の増大に比べると、わが国では八木誠一氏によるギリシア語版からの邦訳と解説があるぐらいで⁷⁾、総じて低調である。

I. 外典『トマスの幼時福音書』について

幼少年期のイエスに関する情報はきわめて限られている。聖家族がエジプトからナザレに帰還したイエス5歳の時から、過越しの祭でエルサレムに上がりユダヤの学者たちと議論する12歳までの間、イエスがどんな生活を送っていたのか、

神の子がその潜在的な知恵や力を幼児としてどう表現したのか、イエスに遊び友達はいたのか、親子関係はうまくいっていたのか、イエスや聖家族は近隣の人たちからどのように見られていたのかなど興味・関心は尽きないが、これらの問題は正典の福音書では完全に無視されている。イエスの幼年時代についていくらか触れているルカさえも、12歳までのイエスについては、「幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがある上にあつた」（ルカ2：40）と述べ、またその後の成長についても、「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された」（ルカ2：52）と記すのみである（聖書からの引用は新共同訳に基づく）。神学的にはこれで事足りたかもしれないが、一般のキリスト教徒たちにとっては、イエスがどんな子どもで、いかに教育されたかは重大な関心事であった。それゆえ、福音書記者たちが省略した箇所を補ってイエスの幼時物語が早い時期に作られ、ギリシア語やラテン語だけではなく、ヨーロッパ諸言語、シリア語、グルジア語、アラビア語、エチオピア語、アルメニア語、コプト語などを通して語り継がれていった。2世紀末にギリシア語で著された『トマスの幼時福音書』は、このジャンルの最初の、かつもっとも影響力の大きかった作品としてとくに有名である。

偉人や聖人と称される人物の幼少年期の物語は、通例、後年彼が果たした役割や出来事からモチーフがとられてくるため、かかる将来を予示する一連のエピソードから構成されるケースが非常に多い。しかもそこでは読者・聴衆の徳や信仰心を涵養するという意図が強く働くため、物語の作者たちは当該人物の神童性を強調するフィクションを創作し、ストーリーテラーたちは声に抑揚をつけたり絵図を利用したりするなどして感覚や記憶に訴えかけていく。よく知られているわが国の例を一二挙げれば、たとえば、幼少時「真魚」（まお）と呼ばれた空海が5～6歳のときによくした遊びは、粘土をこねて仏像を作り、それを藁葺きの小屋に安置して礼拝することであつたし（参照『高野大師行状図画』親王院本、第一巻2「幼稚遊戯」）、また「勢至丸」と呼ばれた幼少年時代、法然は邸宅の庭で友達と一緒に竹馬遊びに興じる一方、屋内では西の壁に向かって合掌して坐る癖があつたという（参照『法然上人行状図画』知恩院、第一巻2）。

イエスに関して言えば、幼時物語の作者たちがそこで發揮した、たとえば、太

陽光線を滑り台に見立てて遊んだといったイマジネーションにはただただ驚かされるばかりであるけれども、しかしながら、肩にたまたまぶつかった少年や体罰を加えた学校教師を彼がいとも簡単に呪い殺してしまう話には—もちろん彼らはその後再び生き返ってくるのだが—、「なぜ」と首をかき上げてしまう。2世紀後半から始まるとされる「正典 canon」結集への動きのなかで、『トマスの幼時福音書』が教会正統から「外典 apocrypha」として排斥され⁸⁾、かつ「異端」として厳しく非難されていくのも⁹⁾、幼児イエスのこうした非キリスト教的な振る舞いにその一因があったと思われる。

初期ギリシア教父の一人で、当時リヨンの司教であったエイレナイオス—ラテン名はイレナエウス (Irenaeus, ca.130-202)—が、『偽称グノーシスの正体暴露とその反駁』(ラテン語訳の通称は『異端反駁』)第1巻20章1節で行った幼時福音書への言及は、それがグノーシス主義批判と密接に結びついていたがゆえに、影響はきわめて大きかった。それによれば、グノーシス派の一グループであったマルコス派は、イエスは生まれたときから全知全能で、彼だけが「不可知の至高存在」(Unknowable)を知っているとする自説の論拠として、生徒イエスが「ベータを発音せよ」という教師の命令を拒否し、代わって、教師にアルファの本質とその形状の構成秩序を説明したというエピソードをあげていた¹⁰⁾。エイレナイオスは同箇所でのこのイエスと学校教師の話を「誤った邪悪なもの」¹¹⁾と断じていたが、彼の批判はローマのヒッポリュトス (Hippolytos, c.170-235) やオリゲネス (Origenes, c.182-251) らにも継承され、幼時福音書は以後たえずグノーシス主義と結びつけられてきた。

研究者たちの間で長年議論されてきたこの幼時福音書とグノーシス主義との関係をめぐる問題は、1945年にコプト語で書かれたナグ・ハマディ文書 (Nag Hammadi) と呼ばれる写本群が発見され、そこから本物の『トマスの福音書』の校訂本が公刊された時点 (1959年) で決着がつくはずであった。というのも、これまで「トマスの福音書」という名で通っていた幼時福音書が、実は114の文からなるイエスの語録集である『トマスの福音書』とはまったく違う作品で、しかも特定の教義に対する関心がきわめて薄いことがはっきりしてきたからである。以後、両者を明確に区別するために、幼時物語は「トマスの幼時福音書」と

称されるようになったが、それで一段落したわけではなかった。従来からの仮説を保持する研究者たちは、グノーシス主義的要素が原本に存在していたことを前提にして、それはカトリックの校訂者たちによって取り除かれていったのだと主張し始めた。オスカー・クールマンはその代表的な理論家の一人で、幼時福音書はグノーシス派の人によって書かれたとの前提からこう論じていた。グノーシス派が幼時福音書にひかれていったのは、そこでは幼児イエスが、奇跡を起こすことができる無限の力をすでに有しているため、発達する必要などまったくない存在であったからであった。幼時福音書の原本の背後には、イエスの身体性、人間性を否定するこの仮現説（Docetism）が本来あったはずであるが、これは時間の経過とともに薄れていった、と¹²⁾。2001年にトロント大学に提出されたトニー・バークの博士論文は、今なお研究者たちの間で一部支持を得ているこの仮説を「削除理論」（expurgation theory）と命名して批判し、改めて幼時福音書がグノーシス主義的な作品ではなかったことを論じたものであったが¹³⁾、近年の研究動向はこの線に進んでいるように思われる。2011年に出版された『外典福音書—テキストと翻訳—』の編著者たちも¹⁴⁾、幼時福音書の内容にはグノーシス的だと解釈されてもおかしくない箇所があったかもしれないが、イエスを他の人間よりも優れた者として描き出そうとするものは何もないし、またグノーシス的な宇宙論や神話学、それにイエスの描写で仮現説的なものは何もないとして、幼児イエスの奇跡やエピソードをグノーシス的なものとして解釈することに否定的である。

ところで、教会正統からは公的に批判・排斥されていった幼時福音書であったけれども、一般のキリスト教徒たちの間ではその人気は高く、話し言葉の文化を介して各地域で生き続けていった¹⁵⁾。古代語および中世語に訳された写本が13種類にも及んでいたという事実は¹⁶⁾、まさにこの人気の高さや裾野の広がりを裏付けていよう。だが逆に、歴史の各段階でさまざまな言語に文字化されていったがゆえに、幼時福音書については、そのもっとも初期の作品は何か、それはいつ、どこで、誰が書き、どのような内容から構成されていたのかという、オリジナル・テキストに関する問題が常に議論されてきた。一般的には、幼時物語の内容に触れたエイレナイオスの『異端反駁』が180年頃に書かれたこともあって、2世紀後半にギリシア語圏の東部地域で書かれたのではないかと推測されている。しか

しながら、テキスト問題を集中的に論じているトニー・バークによれば¹⁷⁾、現存する14冊のギリシア語写本の大半が14・15世紀のもので、初期のテキストとされているものから一千年以上の隔たりがあること、また5～6世紀頃に書かれたとされるシリア語写本の発見から、幼時福音書のもっとも初期の形式はシリア語版で、ギリシア語、ラテン語、アルメニア語、アラビア語などの各版はすべてそこから派生してきたとする先行研究などを受けて、現在ではSever J. Voicu(1991 & 1998)が各国語版の写本に直接当たって比較検討して出した結論、すなわち、シリア語版、古ラテン語版、グルジア語版、それにエチオピア語版を合体したものがオリジナルにもっとも近い、とする見解が通説となっているという。だがこの結論とて、未刊の8冊のギリシア語写本にまで調査の手を広げてVoicuの説を吟味したトニー・バークによると、修正を必要とする。彼女によれば、11世紀のエルサレム写本(Sabaiticus gr. 259)が最古のギリシア語版で、これこそがテキストの批判版の基礎となるべきものということになる。

オリジナル・テキストの解明が、批判版の確立に向けて避けて通ることのできない課題のひとつで、幼時福音書の歴史学上および文献学上の重要なテーマであることは十分理解できる。しかし、この問題に深入りすることは筆者の能力の範囲をはるかに超えているのでここで中断し、以下では、中世において広く読まれた幼時福音書の代表的な作品を取りあげて分析し、批判的検討を加えていきたいと思う。

Ⅱ. 幼時福音書の作品分析

ギリシア語版

どの版をもって幼時福音書の底本とするかについては、研究者たちの間で一致した見解があるわけではない。しかしながら通常は、ドイツの著名な聖書学者コンスタンティン・フォン・ティッシェンドルフ(Constantine von Tischendorf, 1815-1874)が1853年に編集・出版した長短二つのギリシア語版とラテン語版をベースに研究が進められてきた。中でも15世紀の二つの写本(ボローニャ版とドレスデン版)に主に基づいて構成された、全19章から成るギリシア語版テキストはもっとも良く知られている作品で、現代に至るまで大きな影響力を有している。

15世紀の別の写本に基づく短編のもうひとつの版（全11章）と区別するため、前者はギリシア語版A（Greek A）、後者はギリシア語版B（Greek B）と呼ばれる。内容が異なるギリシア語版が複数存在していること自体、口承文化の中で幼時物語が存続・発展していったことを表しているが、このことは同時に、幼時福音書のエピソードの多くが自己完結的で相互の結びつきがゆるく、したがってストーリーテラーたちが時と場所に応じて手を加えながら受け継いでいったことを示している。ちなみに、現代の聖書学者J. K. エリオットは、ギリシア語版Bに見られるような縮減された幼時福音書は、元々あったオリジナルなものから不穏当な箇所が削除されていった結果ではなかったかと考えている¹⁸⁾。以下、ギリシア語版A全19章を基にその内容を概説しておこう。なお、ギリシア語版Bには、ギリシア語版Aの第12章と第14章～第19章はない。

ギリシア語版Aは、「主の幼年時代に関するイスラエルの哲学者トマスの説明」と題されたタイトルをもつ。ギリシア語版Bは著者を「聖なる使徒トマス」と記す。名前が挙げられているトマスは、十二使徒の一人でイエスの復活を自分の手で脇腹の傷を確認するまで信じなかった、あの「疑い深いトマス」ではない。ましてや『トマスの福音書』の著者と同一の人物でもない。11世紀に追加された著者トマスの名は、あくまで幼時福音書に権威をもたせるために利用されたにすぎない。

第1章には、写本の通例にならって、本書の“序”にあたる書き出しの言葉がこう記されている。

「わたし、イスラエル人トマスは、異邦人であるわが兄弟たちすべてに、わが主イエス・キリストの幼年時代の大きいなる行状と、彼がわれわれの地で生まれてから後に行った事柄すべてを知らせる必要があると考える。その始めは次の通りである。」

第2章が、したがって、イエスの幼時物語の実質的な始まりとなるが、幼時福音書の作者が読者として念頭に置いていたのが「異邦人たち」(the Gentiles)であったことは、この作品の読解においてきわめて重要であると思われるので一言説明しておこう。「異邦人」とはここではユダヤ人以外のキリスト教徒を指す。ユダヤ人はモーセの律法を守らない他民族を異邦人と呼んで蔑んでいたが、この異邦人たちの地域にパウロやバルナバらは布教活動を行い、キリスト教会は信者を増

やしていく。ところがエルサレムに結集するユダヤ人キリスト教徒たちは、彼ら異邦人キリスト教徒に対して、割礼や食事などのモーセの慣習の遵守を要求し、割礼を受けなければ救済されないと主張し始めた。ここから彼らとパウロらとの間で激しい対立と論争が起こってくる。この間の事情は『使徒行伝』第15章で語られているので有名であるが、こうしたユダヤ人たちとの緊張・対立関係が幼時福音書の成立の背後に働いていた点を認識しておくことは、同書の歴史的性格や図像学上の特徴を理解する上でもきわめて重要で、この点は後に詳述する。

さて、物語は、当時5歳であったイエスが行う奇跡で幕が切って落とされる。小川の浅瀬で遊んでいた幼児イエスはそこに池を造って水を溜め、一言命令を発して水をきれいにする。次にそこから粘土を取ってこね、12羽の雀のフィギュアを造った。ところがその日が安息日であったため、一緒に遊んでいたユダヤの少年が「イエスが安息日を汚した」と父ヨセフに言い付ける。現場に急いで駆けつけたヨセフが「なぜ戒律を破ったのか」と詰問すると、イエスは両手をぼんと叩いて「飛んでゆけ」と命令した。すると粘土の雀たちは生命を与えられ、鳴きながら飛んでいった（第2章）。その場には律法学者アンナスの息子もいた。彼は手にした柳の枝でイエスが造った池を壊し、水を放出する。イエスはこれに怒り、「おー、邪悪で、不信心で、愚かな者よ！今にお前は木のように枯れ、葉も根も実も付けないであろう」と呪った。すると少年は完全に干からびて死んだ。子どもの両親は彼を持ち上げてヨセフところに運び、教育がなっていないと彼を責める（第3章）。

後日、イエスが村を通り抜けていると、一人の少年が走り寄ってきて（ギリシア語版Bは「石を投げて」と記す）、彼の肩にぶつかった。イエスが呪うと彼はたちまち倒れて死んだ。殺された少年の両親はヨセフにこう迫る。「こんな子を持っているからには、あなたは村でわれわれと一緒に暮らすことはできない。それがいやなら、彼に（人を）感謝して呪わないように教えよ」と（第4章）。ヨセフはイエス呼び寄せ、「なぜあんなことをするのか」と叱る。イエスはヨセフに「あなたの口から出た言葉とは思えない」と述べて黙り込むが、抗議に来た人々は罰を受けるべきだと主張し、彼らを盲目にする。これを見たヨセフはイエスの耳を引っ張って罰するけれども、逆にイエスは怒って父に言う。「私があな

たの子であることが分からないのか。私を困らせてはいけない」と（第5章）。

その場に居合わせた「ザアカイ」¹⁹⁾ という名の学校教師は、子どもが親に横柄な口の利き方をしているのを見てびっくりする。数日後、彼はヨセフを訪ね、次のように述べてイエスの教育担当を申し出る。「息子さんを私に預けなさい。そうすれば彼に文字や知識、それに目上の人々に対する挨拶の仕方や年長者、父親を尊敬する心を教えましょう」と。この箇所は、ギリシア語版Bでは、まずヨセフがイエスの手を引いて学校教師ザアカイを訪ね、「教師よ。この子を引き受けて下さい。そして彼に文字を教えて下さい」と依頼し、それにザアカイが応ずるものとなっている。いずれにせよ、イエスは学校にあがる。図2はその様子を描いた15世紀の写本挿絵で²⁰⁾、ヨセフもイエスも後光を付けている。イエスは左手にホーンブックをもっており、筆記道具のステイルがその取っ手からぶら下がっている。校舎は北イタリア風建築で、教室は手に負えない生徒たちで溢れかえっている。ホーンブックが床や校舎の外に捨てられている。

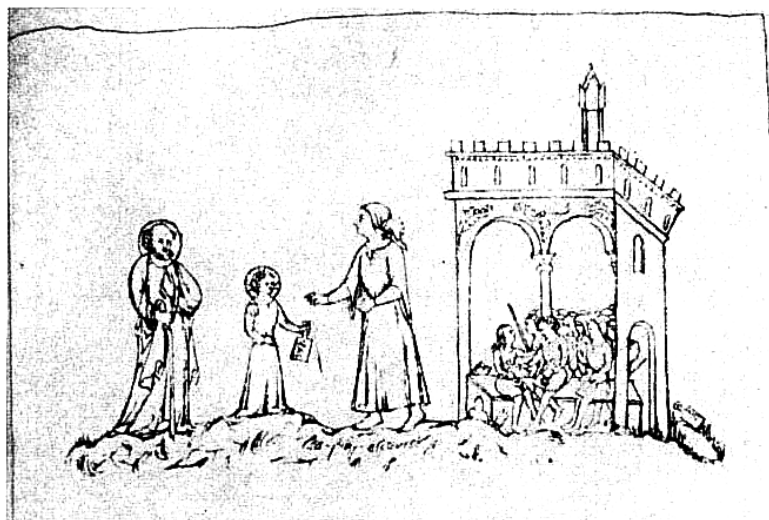


図2 イエスを教師に預けるヨセフ
(15世紀の写本：アンブロジオ図書館蔵)

初学者教育の慣例に従って、ザアカイはイエスにアルファベットをその最初の文字「アルファ」²¹⁾から教えようとした。しかし彼はすぐに挫折する。「アルファ」に続いて「ベータ」を発音するように言われたイエスは、「アルファの本質を知らないあなたがどうして他人にベータを教えることができるのか。偽善者よ。もし知っているのなら、まずアルファを教えよ。そうすればそのときベータについてもあなたを信じよう」と反論し、教師にアルファについていろいろと質問する。ザアカイはこれに答えることができず、遂には立場が逆転して、イエスから最初の文字の構成について教えられることになる（第6章）。恥をかかされたザアカイは居並ぶ人たちに向かってこう言う。自分には彼の発する言葉の意味がまったく分からない。この子は地上で生まれたのではない。彼は火すらも制御できる。世界が創造される前に彼は生まれたに違いない。ヨセフよ、お願いだ。彼を家に連れ帰ってくれ、と。こう嘆願したのち、ザアカイは最後にイエスについて、「彼は何か偉大な存在だ。神か天使か、あるいは何と呼べばよいのか私には分からないのだが」と語る（第7章）。ザアカイの告白はイエスを喜ばせる。イエスは教師に、「今度はあなたが学習して実を結ばせなさい。心の中では見えなかったものを見えるようにしなさい」と述べたのち、自分は天から遣わされた存在であると告げる。話が終わると、これまで彼の呪いで死んだ人々は全員回復し、誰もイエスを怒らすことはしなくなった（第8章）。

以後、イエスはその能力を人々のために使う。最初に、家の屋上で遊んでいるときに落下して死んだ仲間を彼はすぐさま跳び降りて蘇生させた（第9章）。次に、木を割っている最中に斧で足を怪我した若者を治癒した（第10章）。6歳になると、母親に井戸から水を汲んでくるよう頼まれるが、途中で人とぶつかって水差しが壊れたため、自分の衣服を脱いでこれに水を満たし、母のもとに運んだ（第11章）。8歳になると、イエスが蒔いた一粒の種から奇跡的な収穫が得られたため、村の貧しい人々を呼んで麦を分け与えた（第12章）。また木材を切り間違っただけに注文の寝台を作れずに困っていた父親を、イエスは短い木片をつかんで引き伸ばし、寸法を合わせて助けた（第13章）。

わが子が心身ともに活動的になってきたと見たヨセフは、イエスが文字を知らないままているのは良くないと考え、彼を別の学校教師（後の版ではレヴィ Levi

という名が付く) のところに連れて行った。この二番目の教師もアルファの発音から教育を始めたが、最初の教師の場合と同様、イエスは、「もしあなたが本当に教師で文字について良く熟知しているのなら、アルファの力について話して下さい。そうすれば私もあなたにベータの力について話しましょう」と反論して、「ベータを発音せよ」という教師の命令を拒否した。教師はこれに激怒して鞭打とうと手を挙げたが、そのときイエスが呪ったため、鞭をもった教師の右手はすぐに萎えていき、彼自身も気を失って倒れ落ちていく(図3²²⁾)。ヨセフはマリアに、イエスを怒らせた者は死んでしまうので、彼を外に出さないように厳命する(第14章)。しばらくするとヨセフの親友である教師が訪れ、イエスを学校に連れてくるよう促す。ヨセフは躊躇するが、この三番目の教師はイエスを連れて帰る。学校に入るや否や、イエスは書見台に置かれていた本を手に取り、「文字は読まずに、口を開いて聖霊によって語りかけ」、周囲の人々に律法を教え始めた。彼の話の聴いた人々は内容の豊かさと言葉の巧さに驚いた。教師の身に何か起こりはしないかと心配して学校に駆けつけたヨセフに、教師はイエスには神の恵みと知恵が満ちあふれていることを告げる。イエスは、この教師は正しく証言したとして、二番目の教師の治療を約束する(第15章)。

これから以後、イエスは次々と慈愛的な奇跡を行っていく。まず、毒蛇に噛まれた兄弟ヤコブを救う(第16章)。次に、病気で死んだ近所の赤ん坊や仕事中に屋根から落ちて死んだ大工を蘇生させる。これらの出来事を目撃した群衆たちは一様に、「この子は神の使いだ」、「天から来た者だ」と言ってイエスを礼拝した(第17・18章)。物語は、12歳のイエスが神殿でユダヤの学者たちと討論



図3 イエスを殴った教師の死
(15世紀のフランスの写本)

する話で終わる。ルカの福音書（2：46）ではイエスは彼らの話を聞いたり質問したりするだけであったけれども、幼時福音書ではイエスはさらに「律法の主要点や預言者たちの寓話」を説明し、「年長者や学者たちを沈黙させた」（第19章）。

ラテン語版

ティッシェンドルフがヴァチカン写本から編纂したラテン語版（全15章）は、ギリシア語版Aと似ているけれども、その最初の3つの章はギリシア語版のいずれにも存在しない²³⁾。これら3章はエジプト滞在の聖家族を扱っており、聖家族のエジプトへの避難を記したマタイの福音書（2：13-15）と、5歳のイエスから始まる『トマスの幼時福音書』とをつなぐために設けられたものであることが分かる。3章はそれぞれ独立したストーリーで、以下の内容から構成されている。

ヘロデ王の追っ手から逃れてエジプトへ向かった聖家族は、同地に着くと、ある寡婦の家に逗留する。1年が経過し、3歳になったイエスは友達と遊び始めた。あるとき彼は塩漬けされた干物の魚を持ってきて鹽に入れ、それに生命を吹き込んで動き回らせた。続いて彼は魚から塩分を出させ、水中を泳がせた。こうした奇跡が寡婦に告げられると、彼女は大急ぎで聖家族を家から追い出した。第2章は、マリアとともにエジプトの市街を歩いていたイエスが、学校の壁に止まっていた12羽の雀が授業中の教師の膝に落ちたのを見て大笑いするところから始まる²⁴⁾。自分が笑われたと思った教師は激怒して、生徒に命令してイエスを教場に連れて来させ、そして彼の耳を掴んで「いったいなぜ笑ったのか」と問い質す。イエスは手に付いた小麦を見せながら、雀に餌をやったが場所が街路中央で危険なため、雀たちはそれを学校の壁の上に運んだ。ところが今度は餌の奪い合いをしたため壁から落ちてしまった。こうイエスが事情を説明すると、学校教師はイエスを母とともに町から追放した。追放の理由は何も語られない。寓意に満ちた話であるが、現時点では確証をもって説明できる段階にないため解釈は控えておこう。第3章はナザレ帰還の話である。マタイの福音書（2：19-20）では、ヨセフの夢枕に現れた主の天使のお告げで聖家族はナザレに帰ることになっているが、幼時福音書では天使が告げる相手はマリアで、彼女に導かれて一行はナザレ

にある彼女の父が所有する土地に帰ることになる。ただ、ヘロデ王の死後のエルサレムが落ち着きを取り戻すまで、ヨセフの判断でイエスは砂漠にとどまった。「ヨセフは知性を与えてくれた神に感謝した」。

『偽マタイの福音書』

ラテン語によるイエスの幼時物語は、8世紀ないしは9世紀に編集された全42章の『偽マタイの福音書』(The Gospel of Pseudo-Matthew)でも読まれた。オリジナル・タイトルは『マリアの誕生と救世主の幼年時代の物語』(Historia de Nativitate Mariae et de Infantia Salvatoris)で、現存するもっとも初期の写本は11世紀の作品。「偽マタイの福音書」という名称は、ティッシェンドルフがこの作品を編集した1853年に始まるが、彼が作者を「偽マタイ」と命名したのは、本書の冒頭に、この作品が「聖なる使徒マタイによってヘブライ語で書かれ、聖なる長老ヒエロニムスによってラテン語に翻訳された」、とする説明文があったからであった。

本書には、序として、教父ヒエロニムス(Hieronymus, c. 340-c. 420)と司教たち(CromatiusとHeliodorus)との間で交わされた書簡が掲載されている(もちろんフィクション)。そしてその中で、一方の司教たちには、福音書記者である聖マタイが書いたヘブライ語の作品が教皇によって新たに発見された旨を報告させ、他方のヒエロニムスには、マタイは出版目的で書かなかったために、それは代々「きわめて宗教的な人物」に内々に伝えられてきたと語らせて、本作品がすでに出回っている既存の聖母の誕生物語やイエスの幼時物語とは本質的に異なるものであることを示唆する。かつて幼時福音書を非難するよう教皇たちに働きかけたヒエロニムスの名が、本書に権威と信頼性を与えるために持ち出されてきたのは、まさに「奇妙な皮肉」²⁵⁾としか言いようがないけれども、この福音書が、マリアの生涯を記した2世紀の外典『ヤコブの原福音書』(Protevangelium of James)と『トマスの幼時福音書』との合作作品であることは、以下に見る作品の章構成からも明らかであろう。

『偽マタイの福音書』(全42章)は、第1章～第17章までが『ヤコブの原福音書』に、また第26章～第34章、第37章～第39章、それに第41章が『トマスの幼時福音

書』に基づいている。内容的には、『ヤコブの原福音書』の第18章（イエスの誕生で時間が止まった状況を記したヨセフの観察）、第22章（ヘロデ王の追っ手から逃れるために息子ヨハネを連れて山に登ったエリザベスが体力も尽きたため神に祈ったところ、山が二つに裂けて母子を隠し、天使が守ってくれたという話）、第23・24章（エルサレムの神殿で祭司ザカリアがヘロデ王の遣いの者に殺される話）、それに最終の第25章が削除されている。その削除された箇所は聖家族のエジプトへの避難物語を挿入して、第18章から幼児イエスの奇跡を語り始める。その奇跡談は新たに創作されたものが多いが、いずれも中世では馴染み深いものになっていく。

たとえば、幼子イエスが砂漠の洞窟にいた多くの竜を鎮め（第18章）、ライオンやヒョウがイエスを崇拜し、頭を下げて道案内をした話（第19章）。また空腹のマリアにヨセフが棕櫚の木の実をとってやろうとするが、高すぎて摘み取れない。そこでイエスが曲がるように命令すると、棕櫚の木がその梢を足元まで下げてくれたため、聖家族が喉の渇きと空腹を満たしたという話（第20章）。そしてその木を祝福して、イエスが翌日天使に枝を天国に運ばせたという話（第21章）が続く。一行は旅を続け、やがてエジプトに到着する。休息を得ようとカピトル神殿に入ると、355体もの異教徒の神々がすべて真逆さまに倒れた（第22章～第23章）。それを聞きつけた当地の支配者アフロドシウスは軍隊を伴って神殿に入るが、神々の顔がことごとく砕け散っているのを見て、イエスを抱くマリアの前にひれ伏し礼拝する（第24章）。なお、同作品はその最終の第42章を聖親族の宴会にあて、ヨセフの4人の息子たち（ヤコブ、ヨセフ、ユダ、シメオン）と2人の娘たち、それにマリアの妹であるクレオパのマリアも出席して、イエスから祝福を受けたこと、そして兄弟たちもイエスを見守り、彼を畏怖したことを記して物語の幕を閉じている。

上述の内容分析からも分かるように、『ヤコブの原福音書』と『トマスの幼時福音書』の合作と言っても、『偽マタイの福音書』は二作品を単に貼り合わせただけの作品ではない。編集者はストーリーとしての一貫性をもたせるために空白部を埋めたり、既存のものにあれこれ手を加えたりしている。言うなればそれは、装いを新たにしたイエスの幼時物語の再デビュー作品なのである。これによって

『偽マタイの福音書』は従来とは異なる性格をイエスの幼時物語に付与し、次の時代を切り開いていくことになる。この点は後述するとして、ここではそうした変化をもたらすことになった合作という作業がなぜ必要とされたのか、言い換えれば、本来個別に成立・発展し、単独でも読まれてきたマリアの誕生物語とイエスの幼時物語が、なぜこの時期にひとつにまとめられたのか、という問題については触れておかなければならないだろう。

これに関しては、J. K. エリオットは、マリア崇敬を促進したいという気持ちが二つの作品を結びつけたと推測している²⁶⁾。他方、オスカー・クルマンは、『偽マタイの福音書』の誕生の背後に働いていたのは、増大し続ける幼時福音書の人気に押されて、それを力で押さえ込むことができないとすれば、作品に含まれている残酷でセンセーショナルな内容をいくらかでも洗練された形式に改めることが必要だとする認識の高まりであったと考えている²⁷⁾。それぞれに一理あるが、作品の冒頭部に挿入された往復書簡に関する以下の分析から、筆者としてはクルマンの説を支持したい。

二人の司教がヒエロニムスにラテン語訳を依頼したのは、純粋にキリスト教的な思いからであった。彼らは、現在読まれているマリアとイエスの外典作品にキリスト教に反する内容が多く含まれており、そのために信者たちが「アンチキリスト」の手に落ちてしまうのではないかと危惧していた。彼らの見立てによれば、本来優れた出生と成長の記録であったはずの作品がこうした危険性を孕むようになったのは、ひとえに「異端者たち」が「悪い教義」を教えようとする気持ちから自分たちの出生をない交ぜにしたからであった。こうした事態を排除するためにも、今般見つかったヘブライ語作品の翻訳は、『ウルガータ』聖書の翻訳者として名高いヒエロニムスにぜひ頼みたい、というのが司教たちの願いであった。こうした彼らの心情を汲み取ってヒエロニムスも以下のように応じているが、それはまさに『偽マタイの福音書』編纂者の自己の仕事に対する自負と作品の正当化の弁そのものであった。ヒエロニムス（＝編纂者）は言う。

「われわれはこの小著を正典には入れませんが、使徒で福音書記者である人によって書かれたものを翻訳すれば、異端の誤りは暴露することができるでしょう。……救世主の聖なる幼年時代について知識を得られた人々は、必ず

「われわれを援助して下さいと信じておりますので、われわれが実践しているのは、キリストの愛なのです。」

この作品が後世に与えた影響は計り知れないものがある。現在確認されている写本は180点以上にのぼる²⁸⁾。『ヤコブの原福音書』（原著はギリシア語）のラテン語版が現存しないのは、その内容が『偽マタイの福音書』ですで見られたからだとする推測が成り立つのも、無理からぬところであろう。さらに特筆すべきは、そこで形成された聖家族や幼児イエスのイメージが写本から飛び出して一般のキリスト教信者にも幅広く訴えられ—たとえば、12世紀前半のツィリス（スイス）のサン・マルティン教会（St Martin's Church in Zillis）の天井装飾画、1327-35年制作の全編カラーイラストの『ホルカム聖書』²⁹⁾、それにイングランドのヘルトフォードシャーにある聖ペテロと聖パウロの教会の壁に取り付けられた1320-30年制作のトリング・タイル³⁰⁾ ほか—、イエスの生涯の重要な一コマとして定着した点である。中世末期およびルネサンス期の写本作家や画家たちは「エジプトへの避難途上の休息」を好んで主題にしたが、地面に坐って安らぐ聖母子の背後には、ローマ兵が聖家族を追うのを諦めたという小麦畑（種蒔き）の奇跡や、ヨセフが曲がった棕櫚の木から実を取っている場面—コレッジオ（Correggio, 1489-1534）の「スープ皿の聖母」（1525-30）が有名—、それにエジプトの神々の像が二つに折れて真逆さまに倒れている場面がしばしば描き込まれていた。

アラビア語版

最後になったが、『トマスの幼時福音書』のもうひとつ別のコレクションであるアラビア語版についても触れておこう。この作品は6世紀のシリア語版から派生し、ポスト・イスラム時代（7世紀）にアラビア語に翻訳されたと考えられている。イエスの誕生から12歳までの出来事を全53章で構成した比較的大部の作品であるが、中核となっているのは幼児イエスにまつわる奇跡で、とくに第11章～第35章は、悪魔に取り憑かれて目が見なくなったり口が利けなくなったりした子ども、女性、新婚の夫婦たち、それにハンセン病などの難病で苦しんでいる人々が、イエスの身体や彼の衣類を洗った水を振りかけられた結果治癒されたという話で埋め尽くされている。これら慈愛的な奇跡の大半はエジプト滞在中の出来事

で、イエス本人の行為というよりもむしろ、マリアのとりなしによるものとして描かれている。またこれと同じコンテキストにおいて、共観福音書（マタイ10：1-4；マルコ3：13-19；ルカ6：12-16）で名前が挙げられた十二使徒の幾人かが奇跡的に救われたエピソードも語られている。たとえば、病気でほとんど死にかけていたけれども、イエスのベッドに寝かせられ、彼の匂いをかいだ途端に生き返ったバルトロマイ（第30章）、悪魔に取り憑かれて近づく者すべてに噛みついていたが、イエスに触れたことで悪魔が犬の姿で出ていき、救い出されたイスカリオテのユダ（第35章）、毒蛇に噛まれたが、イエスが毒を吸い出してくれた結果助かった「カナナイ人シモン」（第42章）—マルコ（3：18）、ルカ（6：15）では「熱心党のシモン」—といった具合である。

イエスの公的生活との関連で興味深いのは、後にゴルゴタの丘でイエスと一緒に十字架にかけられた二人の盗賊の話（第23章）であろう。エジプトへの避難途上にあった聖家族は、盗賊が横行するという砂漠にやって来た。ヨセフとマリアは人目の付かぬ夜にこっそり横断しようとするが、ティトゥス Titus とドゥマカス Dumachus という名の二人の賊に捕まってしまう。行く手には彼らの仲間が大勢寝ている。ティトゥスは一行をそのまま通してあげようとするが、ドゥマカスは反対する。そこでティトゥスは彼に銀貨(担保として)と自分のベルト(口止め料として)をあげて、聖家族が無事に通過するのを助けた。この善き盗賊にマリアは感謝して、主なる神はお前の罪を赦して下さるだろうと述べ、イエスはマリアに、「30年後に自分はエルサレムで十字架にかけられるだろうが、彼ら二人の盗賊も私と並んで十字架にかけられるだろう。そしてその日の後、ティトゥスは天国で私の前に来るだろう」と予言する。言うまでもなく、この話はルカの記述（ルカ23：39-43）を基に創作されたものである。

二人の盗賊の話もそうだが、現存するギリシア語版やラテン語版、それに『偽マタイの福音書』には見出されないのに、中世ヨーロッパでひろく知られるようになったイエスの奇跡の多くは、アラビア語版に由来している。これは幼時福音書が相互に影響しあっていたことを示唆するものだが、そうして他の地域に移入されると、物語がその性格を変えてしまうこともたびたび起こってくる。そうした事例を以下2点紹介しておこう。

ひとつは、染物屋での奇跡（第37章）。染料が異なる桶それぞれに衣類を入れて染めなければならなかったのに、イエスは衣類すべてを藍色専用の桶に入れてしまった。これを見た親方サーレムは、「おー、マリアの子よ、何ということをしてくれたのだ。これで俺の評判もがた落ちだ」と怒るが、イエスが桶から衣服を取り出すと、衣服は親方が願っていた色に染め上がっていた。アラビア語版はこの話を、少年たちと走り回って遊んでいた7歳のイエスが、通りかかったついでに行った奇跡として描いていたけれども、オックスフォード大学ボドリアン図書館に所蔵されている14世紀の写本（MS. Selden Supra 38, Bodleian Library, Oxford）は、染物屋の「徒弟」となったイエスのエピソードとして扱い、しかもイエスが徒弟に出されたのは、彼を「悪戯から遠ざけておくため」であり、またイエスが衣類をまとめて桶に入れたのは、「遊びに出かけるため」であったと説明している³¹⁾。

もうひとつは、オープンの子どもたちの話（第40章）。町に出たイエスは一緒に遊ぼうと思って少年たちに近づいていった。ところがユダヤの少年たちはイエスを避け、親たちも彼らをオープンの中に隠す。後から来たイエスが「みんなはどこに行ったの？」と尋ねると、親たちは「ここには誰もいない」と答えた。再び「オープンの中には何が入っているの？」と聞いたところ、「子ヤギだ」という答え。そこでイエスが、「子ヤギたちよ、出てきなさい。あなた方の羊飼いに」と言うと、ヤギの姿をした少年たちが出てきて、イエスの回りで戯れ始めた。これを見た親たちは恐れおののき、崇敬しながらイエスに慈悲を乞い、子どもたちを元の姿に戻してもらおう。アラビア語版はこのエピソードを、イエスが「善き羊飼い」であること、また全知全能の存在者である彼から隠し通せるものは何ひとつないことを証明するものとして位置づけている。子どもたちがイエスと接触するのを親たちはなぜ嫌がるのか、その理由はどこにも書かれていない。だがこのエピソードは、西ヨーロッパとくにイングランドに渡るや否や、反ユダヤ主義のストーリーに変貌する。14世紀前半の『ホルカム聖書』からとられた図4³²⁾は、上述の出来事を三場面の流れで図解しているが、そこからもしっかりと見て取れるように、「子ヤギ」は「豚」という典型的な反ユダヤ主義のシンボルに改変されている。



図4 豚に変えられたユダヤの子どもたち
（『ホルカム聖書』1327-1335年：大英図書館蔵）

なぜ「子ヤギ」は「豚」に変えられたのだろうか。中世におけるユダヤ人迫害の歴史を紐解けば、その理由は簡単に見えてくる。1144年にイギリス東部の町ノリッジで発生したいわゆる「儀式殺人」——キリスト教徒の血を過越しの儀式に用いるために、ユダヤ人が無垢の子どもを誘拐し殺害したという噂を基に起こった事件——を契機に、イングランドではユダヤ人に対する嫌悪・反感が増大し、1217年にはユダヤ人は全員胸に「黄色いバッジ」を付けることが義務づけられ、そして1290年には国王エドワード1世から国外追放の命令を受ける。中傷の波は大陸にも伝播し、ドイツやフランスでも相次いでユダヤ人迫害の事件が起こった。中世ヨーロッパのこうした反ユダヤ主義の流れのなかでイエスの幼時物語も読まれ、幼時福音書は“ユダヤ人は嘘つきである”とするユダヤ人非難キャンペーンの一環を担うことになる。

以上、幼時福音書の代表的作品とその歴史的・地域的特性について述べてきた。そこで次に、ギリシア語版を定本として、イエスの幼時物語が構造上において有している特徴は何であり、それが中世社会でどのような機能を果たしていたのかを明らかにしていきたい。

Ⅲ. 幼時福音書の構造分析

すでに述べたように、従来の研究者たちの最大の関心事は、幼時福音書とグノーシス主義との関わりであった。『トマスの幼時福音書』はグノーシス派の人物によって書かれ、初期の原本にはその思想が色濃く反映されていた、とする前提から接近していった研究では、幼時福音書は全知全能であるイエスが究極的存在であることを奇跡を通して証明した作品であるかのように見られてきた。またグノーシス主義との関わりを否定する研究者も、どちらかといえば、幼児イエスが起こす奇跡に軸足を置いて、幼時福音書を読みかつ評価する傾向があった。たとえば、わが国の翻訳者でもある八木氏も、本書は「ほとんど奇跡物語集と呼ばれてしかるべきもの」³³⁾と定義され、こう主張される。

「幼時の奇跡的性格が強調されるのは、単なる聖者伝説の形成ということだけではなく、後に発揮されたイエスの異常な能力が、後天的に修練や学習によって展開したのではなく、全く生まれつきの賜物であったことを示すためと考えられる。それははじめからあったものだ、習得されたものではなく、いわんや架空のものではない、と言いたいのであろう。」³⁴⁾

幼時福音書を奇跡集として見るこうした認識ゆえに、氏は、その改訂訳が荒井献編『新約聖書外典』(1997年)に所収される際、学校教師ザアカイの告白を記した第7章とユダヤの学者たちとの討論を扱った第19章を、前者は直接イエスを語っていないという理由で、また後者はルカの福音書と内容的に一致するという理由で省略された。

ここに興味ある数字がある。公刊未刊を問わず、現存する14冊すべてのギリシア語写本を精査したトニー・バークによれば、全19章から成る『トマスの幼時福音書』は11世紀から12世紀にかけてその形式を完成させたが、初期の写本には書き出しの第1章と斧で怪我をした若者の治癒を扱った第10章、それに子どもと大工の蘇生を記した第17・18章は含まれていなかった³⁵⁾。つまり、原型となる幼時福音書14章のうち6章が学校教師のエピソードで構成され、イエスの教育に関する比重が高い。またラテン語版(全15章)はイエスと学校教師の話に4章を充てているが、その4つで分量的には全体の5割以上を占めている。これらの事実が示唆するものは何か。それは、一言で言えば、イエスと学校教師の対立が幼時福

音書の主要かつ重要なモチーフであったということである。実際、そのテーマを集中的に扱った第6章と第14章は、物語の展開上きわめて重要なターニング・ポイントを成している。

また、これと関連して留意しておかねばならないのは、幼時物語で語られる奇跡は決してランダムに配置されているのではないという点である。奇跡は、大別すれば、三つのグループに集約される。(1) 学校に連れて行かれる以前の幼子イエスの奇跡(第1章～第5章)、(2) 最初の学校教師ザアカイとの対決で少年イエスが勝利し、「偉大な存在」と認められた後の奇跡(第9章～第13章)、(3) 二番目と三番目の教師との出会い・対決を通して、イエスが「神の子」として正式に承認された後に行われた奇跡(第16章～第18章)である。グループ内では各奇跡は一定程度の同質性を有しているけれども、各グループ間では性格は微妙に異なっている。これら三グループの奇跡を分かるところにイエスと学校教師の話が置かれ、それが物語の次の展開を紡いでいる。幼時福音書の最終の第19章が12歳のイエスがユダヤ人の学者たちと議論する話で終わっているのも、それも単なるディスカッションではなく論破した、つまり、「年長者や学者たちを沈黙させた」話で締めくくられているのも、それがイエスの成長の到達点であると同時に以後の公的生活のスタート点にあるからであった。

イエスの奇跡→学校教師との対決→新たな局面の展開、という幼時物語のこの構造上の特徴は、ラテン語版のみに掲載されている冒頭の3つの章でも同様に確認できる。つまり、聖家族がエジプトの町から追放されるきっかけとなった第2章のイエスと学校教師の話は、第3章のエジプト出国のプロローグであり、ナザレへの帰還が単にヘロデ王の死という外的要因によって決まったのではなく、内在的にもそうする必要・必然性があったことを暗示している点で、重要な意味を持ってくるのである。

要約しておこう。幼時福音書は、奇跡の単なる寄せ集めではなく、イエスと学校教師との対立をモチーフとして構成された物語で、これはすべての幼時物語に通底している基本テーマでもあった。この点を念頭に置いて、改めて『トマスの幼時福音書』を再構成するといかなる理解が得られるのか、以下見ておこう。

5歳までのイエスは、もって生まれたその超自然的な力を自分のためののみ使

用していたに過ぎなかった。手造りの池を壊した子どもや肩にぶつかってきた少年をいとも簡単に呪い殺してしまうイエスは、大人たちから見れば、著しく大きな問題を抱えた悪童であり、トラブルメーカーであり、非行少年であった。また、子どもを訓練して社会化することが家父長の任務とされていた当時の社会にあっては、そうした子を持ちながら何ひとつコントロールできないでいる父ヨセフは、いわゆる“ダメ親父”であった。子どもを殺されたユダヤの親たちが怒りをヨセフにぶつけ、イエスをしっかりと規律づけよ、それができなければ村から出て行け、と脅したのも当然と言えば当然であったろう。ヨセフも一応息子を呼んで注意したり叱ったりするが、不首尾に終わる。訴えられた悪童イエスは、何とこともあろうに逆恨みし、抗議に来た村の住人たちを盲目にして意趣返しをするのである。この行動にはさすがのヨセフも我慢できずイエスに体罰を加えるが、息子はこの行為を「浅はかな **unwisely**」行動だとさげすみ、一向に意に介さない。学校教師ザアカイが登場するのは、まさにこの時であった。

ヨセフが年老いていて、イエスとの年齢差があまりにも大きかったことも、家庭での躾や教育が失敗した原因のひとつだったかもしれない。だが本質的には、父親が息子を自分の手には負えない存在だと考えていたことに最大の原因があった。ザアカイはそこに付け入り、ヨセフに「父親代わり」を申し出るのである。息子を預けてくれるなら、アルファベットや学問を教授し、かつ年長者を敬ったり相手を気遣ったりする心、それに彼が社会で生きていく上で必要なマナーやルールを教えてあげようというのだ。息子の扱いに希望が持てないでいたヨセフはこの提案に乗り、自らイエスの手を引いて学校へ連れて行く。

イエスの教育の目的は、彼を規律づけて反抗的な態度や破壊的な行動を取らないようにすること、言い換えれば、社会的に醇化することであった。学校での教育はアルファベットを教えることから始まったが、生徒イエスはすぐにそれに噛みついて、アルファの本質を知らない者がどうしてそれを教えることができるのかと問い質し、最終的には教師の教える意図と行為を否定して彼を打ち負かす(第6章)。負けたザアカイは恥をかかされたことを怨みながらも、公衆の面前でイエスが「偉大な存在」であることを認める(第7章)。これを受けてイエスが語る言葉(第8章)によって、幼時物語は次の新たな段階を迎えることになる。つ

まり、その存在が公的に認められたイエスは、ここではじめて自分が神の子であることを告白して、この世の人々のために役立とうとするのである。

次に転機が訪れるのも、やはり学校教師との関係においてであった。二番目の教師もアルファベットの教えることから始めたことで、最初の教師と同じ運命をたどる（第14章）。ところが三番目の教師は、教える意図は一切示さず、また教えることは何もせず、イエスが聖霊によって人々に語りかけ、律法を教えるのをじっと見守るのである。そして、彼の身を案じて学校に急行したヨセフに、イエスが「神の恵みと知恵に満ちた」存在であることを認めて、ルカの福音書（2：40）の言葉を裏付ける（第15章）。これ以後、イエスはその力をより高次のレベルで発揮して、「神ないし神の使い」（第17章）であることを証明していく。最初の転機するときには比較的身近な人々―遊び仲間、年齢が接近している若者、母親や父親、それに村の住人―のために力を使うだけであったが、今や彼は救世主イエス・キリストとして、人類の救済のためにその力を振り向けていく。幼時福音書のイエスは、学校教師との対決を媒介にして成長し、神の子としての本質を実現していくのである³⁶⁾。

エピローグ

本論文は、『トマスの幼時福音書』の内容分析と構造分析を基にイエスの幼時物語の特質を把握し、イエスと学校教師との対立がそのメイン・モチーフであったことを明らかにしてきた。こうした読解は従来ほとんどなされてこなかったように思われるが、これで問題が解決したわけではない。幼時福音書は悪童イエスを醇化するという役割を学校教育に担わせながらも、その試みはイエスの抵抗で失敗したとしている。このセッティングは何を表しているのであろうか。この問いは、幼時物語の主舞台となったユダヤ人社会のなかでの学校教育の機能や、中世社会における親子関係や子ども観の歴史についてさらなる問いを導いてくれるけれども、ここではこれまでの幼時福音書の分析から明らかになった二点、すなわち、反ユダヤ主義と教育者としての母親の台頭を手がかりに考察を進めたい。

近年の研究は、母国語で書かれた14世紀の作品群に、時代を反映した反ユダヤ主義が色濃く表れていることを強調しているが³⁷⁾、その傾向は、翻って考える

に、学校教師による教育をイエスに全面的に拒絶させるという、幼時物語の筋立てそれ自体にすでに内包されていたのではないだろうか。良く知られているように、ユダヤ人社会は紀元70年に後の皇帝ティトゥス率いるローマ軍によって滅ぼされるけれども（ヨセフスの『ユダヤ戦記』参照）、ユダヤ人たちはいち早く学校を通過儀礼の場として確立することを通して民族としてのアイデンティティを確保していった。イワン・マーカスの『子ども時代の儀式—中世ヨーロッパにおけるユダヤ人の文化変容』（1996年）によれば³⁸⁾、ユダヤの学校教師たちは、まず、22文字の子音文字から成るヘブライ語のアルファベットを教師の前で順に復誦させ、次に、全律法を要約したものとみなされた『申命記』第33章4節の章句——「モーセはわれわれに律法（トーラー）を授けて、ヤコブの会衆の所有とさせた。」——を学ばせ、そして最後に、書き板に刻まれた『レビ記』の最初の詩句を教えていった。マーカスは、上記三つが「古代世界の子どもたちの基礎教育から引き出してきた中世の儀式の全要素」であったと言う³⁹⁾。これに基づけば、教師ザアカイが「アルファ」（ヘブライ語のアレフ）の復誦を執拗にイエスに求めたのは、彼に文字や学問を教えるということよりも（もちろんその目的もあったろうが）、むしろユダヤの儀式に導き入れて、イエスをユダヤ人化するための方法の一環であったと理解できよう。だとするならば、少年イエスの学校教師に対するいささか異常な振る舞いや教育拒否の立場は、彼が悪童であったからでも、また神童であったからでもなく、幼時福音書自体がユダヤ人社会の支配的な価値体系に対する反逆の書としてあったことを裏付けるものではないだろうか。そう解釈してもあながち間違っていないようにも思われる。

幼時福音書の反ユダヤ主義は、「子ヤギ」が「豚」に変換されたところに端的に見られたけれども、総じて言えば、ユダヤ教に対するキリスト教の優位ないし勝利を謳っている点にその特徴がある。『偽マタイの福音書』の以下のエピソードはこれを如実に示していよう。たとえば、教師ザアカイの教育の申し出に対してイエスが、「わたしは律法より前に存在していた」、「わたしはあなた方が父と呼ぶアブラハムを見てきたし、また彼と話をしたこともある」と述べてキリストの先在を主張し、ユダヤ人教師から教育される必要がないことを訴えた第30章、三番目の教師に導かれて学校に入るや否や、ユダヤの律法を教えていた教師の手

から書物を取り上げ、本に書かれている文字は読まずに「生きた神」の偉大な事蹟を教え、結果として学校教師を地面に伏せさせた第39章、さらにカペナウムの金持ちの話で彼を治癒したのがイエスでありキリストであったことを再三繰り返して、「イエスがキリストである」という命題を披瀝した第40章。

学校教師によるユダ人化教育の拒否は、必然的に家庭での教育に向かわざるを得ないけれども、ここで親子関係と教育座標軸に重大な変更がもたらされてくる。これは、『トマスの幼時福音書』では登場機会もまれで（ギリシア語版Aでは第11、14、19章のみ）、最終章でやっと名前が出てくるにすぎない、きわめて控え目な存在でしかなかった母マリアが、後の『偽マタイの福音書』では終始一貫して主役を演じ、イエスの教育に積極的に参画していく過程からも窺い知ることができる。

すでに見てきたように、幼時福音書では、イエスが問題行動を起こしたとき、その責任が問われたのは父のヨセフであった。父子関係が伝統的に親子関係の基本であった。ところが『偽マタイの福音書』ではこの関係が崩れ、大人たちはヨセフとマリアの双方に対して抗議し、親としての連帯責任を求めた。イエスの手を引くマリアがヨセフに先導されて学校の入り口に現れてくるのは、このときである（第31章と第38章を参照）。だが、この光景もやがて母と子の姿しか描かない入学図へと変化していく。親子関係の基軸は父子関係から母子関係へと移行し、子どもの教育イニシアティブも父親から母親へと変わる。この変化は、イエスの問題行動に対してヨセフとマリアがとった対応の違いにも明確に読み取ることができる。

ユダヤの年長者たちと同様、ヨセフもイエスには規律が欠けていると考えていた。だから彼はユダヤ人たちの怒りや圧力を当然のこととみなし、死んだ子どもの両親が抗議に来たときも、彼らの異議申し立てをそのまま受け容れた。しかしながら、彼はイエスへの説諭・訓戒を自らは行わず、母マリアに全面的に託してしまう。父親の威厳はそこにはまったく見られない。イエスの行動を制御する方法として彼に残されていたのは、物理的な手段だけであった。これに対しマリアは、わが子が自分を愛していること——家に帰るとイエスは真っ先に母の元に向かった——を知っていたので、説得するに当たっては優しい言葉をかけることで

影響力を行使できた。イエスもまた「母親を悲しませたくなかったので」、彼自身は殺した少年を生き返らせたくはなかったけれども、母の願いを聞き入れて蘇生させた（第26章）。教師が殺されたときも同様である。イエスを怒らせると人がまた死ぬと考えたヨセフは、イエスを家から一步も外に出すなとマリアに命じたが、この命令に対してマリアは、イエスが神の子であり、したがって神が彼を保護してくれると信じていたので、「何てことを仰るのですか。そんなことが起こるなどと考えてはいけません。わが子を信じるのです」と逆に夫を諭す（第38章）。

イエスの幼時物語の世界においては、以上見てきたように、躰や教育を契機として親子関係や教育関係は変化し、また時代の経過とともに養育や教育に占める母マリアの比重は高まっていく。本稿の冒頭で紹介した1508年のカレンダーの図像は、中世を通して進行したかかる変化のひとつの到達点であったと思われる。

注

- 1) Robert Alt, ed., *Bilderatlas zur Schulund Erziehungs Geschichte*, I, 1960, S. 301. ドイツ語銘の解説にあたっては広島大学准教授の山内規嗣氏から協力を得た。ここに記して感謝する。
- 2) クラウス・シュライナー『マリアー処女・母親・女主人ー』内藤道雄訳、法政大学出版局、2000年、141頁。Hans Wentzel, "Das Jesuskind an der Hand Mariae auf dem Siegel des Burkard von Winon 1277" in *Festschrift Hans R. Hahnloser zum 60. Geburtstag, 1959*, Birkhäuser, 1961, 251-270. には、マリアに手をひかれるイエスを描いた図像史料が15点掲載されている。
- 3) cf. Ayers Bagley, "Mother as Teacher: St. Anne and her Daughter," *Educational Studies: A Jnl of the American Educ. Studies Assoc.* 1979, vol. 9, no. 4, pp. 365-390; do., "Mother as Teacher: St. Anne Teaching the Virgin 14th-15th centuries" (http://iconics.cehd.umn.edu/St_Anne/St_Anne_Text.htm) この論文の初出は、"Mother as Teacher: Image and Idea," American Educational Studies Association, Annual Conference, Nashville, November 1982. である。
- 4) Cf. Pamela Sheingorn, "The Wise Mother" : The Image of St. Anne Teaching the Virgin Mary, *Gesta*, Vol. 32, No. 1, 1993, pp. 69-80. (<http://www.jstor.org/stable/767018>)。同論文は後に Mary Carpenter Erler, Maryanne Kowaleski, eds., *Gendering the master narrative: women and power in the Middle Ages*, Cornell University Press, 2003. pp. 105-

122. に再掲。石井美樹子『聖母のルネサンス』（岩波書店、2004年）の第3章「書を持つ聖母」。
- 5) Mary McDevitt, "'The Ink of Our Mortality': The Late-Medieval Image of the Writing Christ Child" in Mary Dzon & Theresa M. Kenney, *The Christ Child in Medieval Culture: Alpha Es Et O!*, Univ of Toronto, 2012, pp. 224-253.
 - 6) ギリシア語版やラテン語版の英訳は、J.K. Elliott, *The Apocryphal New Testament: A Collection of Apocryphal Christian Literature in an English Translation based on M.R. James*, Oxford University Press, 1993, reprinted 2009. と Bart D. Ehrman and Zlatko Pleše, *The Apocryphal Gospels: Texts and Translations*, Oxford University Press, 2011. を底本として用いた。ただし、いずれもラテン語版は最初の3章しか訳されていない。ラテン語版や『偽マタイの福音書』、それにアラビア語版の英訳のフル・テキストは、THE CHURCH FATHERS ON CD-ROM (<http://www.newadvent.org/fathers/index.html>) で見る事ができる。cf. Translated by Alexander Walker. From *Ante-Nicene Fathers*, Vol. 8. Edited by Alexander Roberts, James Donaldson, and A. Cleveland Coxe. (Buffalo, NY: Christian Literature Publishing Co., 1886.) Revised and edited for New Advent by Kevin Knight.
 - 7) 八木誠一氏の邦訳（タイトルは「トマスによるイエスの幼時物語」）は最初『聖書外典偽典 第6巻』（教文館、1976年）に掲載され、後に荒井献 [編]『新約聖書外典』（講談社文芸文庫、1997年）に一部改訳されて再録された。各々の作品には内容が若干異なる訳者コメントが付いている。
 - 8) カトリック教会が現行の新約27書を正典と認めたのは、ヒッポの会議（393年）とカルタゴの会議（397年）においてであった。聖書の正典と外典、およびグノーシス主義については、『荒井献著作集7 トマス福音書』（岩波書店、2001年）所収の「第六章「正典」と「外典」成立史上におけるグノーシス主義の位置」、荒井献「新約聖書外典－その意義と文学的・思想的性格－」（荒井献編『新約聖書外典』講談社文芸文庫、1997）を参照。
 - 9) クールマンによれば、幼時福音書は3人の教皇たち（ダマスス1世、インノケンティウス1世、ゲラシウス1世）によって非難され、5世紀の教令 Decree でキリスト教徒に読ませてはならない書物の一つとしてリストアップされた。これら一連の動きに影響を与えていたのは、神学的理由からだけではなく、残酷な奇跡に対する嫌悪感からも幼時福音書に反対していたヒエロニムスであったという。Oscar Cullmann, "Infancy Gospels" in *New Testament Apocrypha*, (ed.) Wilhelm Schneemelcher, Philadelphia: Westminster Press, 1963, pp. 363-417. 368 and 405-406.
 - 10) エイレナイオスによれば、マルコス派はこのエピソードを、「不可知の至高存在（英訳では Unknowable）を理解していたのはイエスだけで、この存在を彼はアルファとその字型で啓示したのだ」という意味で説明していた。St. Irenaeus of Lyons, *Against the*

- Heresies*, translated and annotated by Dominic J. Unger, with further revisions by John J. Dillon, Vol. 1, Book 1, Chap. XXI, Paulist Press, p. 76.
- 11) 前掲の Dominic J. Unger の訳で「この偽造されたもの」(this falsification) とされたイエスと学校教師の話は、Ante-Nicene Fathers, Vol. 1. Edited by Alexander Roberts. の英訳によれば、「あの誤った邪悪なストーリー」(that false and wicked story) となっている。
 - 12) Cullmann, *op. cit.*, p. 401.
 - 13) cf. Tony Chartrand-Burk's Ph. D. diss., *The Infancy Gospel of Thomas: The text, its origins, and its transmission*, University of Toronto, 2001.
 - 14) Bart D. Ehrman and Zlatko Pleše, *op. cit.*, 2011, pp. 4-5.
 - 15) cf. Evelyn Birge Vitz, "The Apocryphal & the Biblical, The Oral & the Written, in Medieval Legends of Christ's Childhood: The Old French *Évangile de l'Enfance*" in *Satura. Studies in Medieval Literature in Honor of Robert R. Rymo* (eds.) Nancy M. Reales & Ruth C. Sternglantz, Shaun Tyas Donington, 2001, pp. 124-149. ヴイツは、この作品が口承文学の性格を文章構造的にも色濃く残しているだけではなく、物語を上演していく伝統にも属していることを主張する。
 - 16) Bart D. Ehrman and Zlatko Pleše, *op. cit.*, p. 3.
 - 17) 以下の叙述は主に Tony Chartrand-Burke, 'The Greek Manuscript Tradition of the *Infancy Gospel of Thomas*,' *Apocrypha* 14, 2003, pp. 129-151. に依っている。
 - 18) Elliott, *op. cit.*, p. 70.
 - 19) 綴りはそれぞれの版で異なっている。ギリシア語版 A と B およびアラビア語版は〈Zacchaeus〉、ラテン語版は〈Zacheus〉、『偽マタイの福音書』は〈Zachyas〉、14世紀の写本 Selden Supra 38は〈Zacharias〉と表記。本論文では〈Zacchaeus〉の訳語は、新共同訳聖書(ルカ 19章)でも使用されている「ザアカイ」で統一した。
 - 20) 挿絵はアンブロジオ図書館所蔵(ミラノ)の15世紀のラテン語写本(Ambrosian Library, Milan, L58 sup.)からのもの。cf. Ayers Bagley, "Jesus at School," *The Journal of Psychohistory*, vol. 13, no. 1, 1985, pp. 13-31, fig. 5. 幼時福音書の写本挿絵については以下の研究書を参照されたい。see Adey Horton, *The Child Jesus*, The Dial Press, 1975; D.R. Cartlidge and J.K. Elliott, *Art and the Christian Apocrypha*, London: New York: Routledge, 2001; Pamela Sheingorn, "Reshapings of the Childhood Miracles of Jesus" in Mary Dzon & Theresa M. Kenney, *op. cit.*, 2012, pp. 254-292.
 - 21) ギリシア語版 B (第7章) では、ザアカイはまず「ヘブライ語で」アルファベットを書いて教えたことになっており、したがって最初の文字は、ギリシア語の「アルファ」ではなくヘブライ語の「アレフ Aleph」、また「ベータ」は「ベース Beth」ということになるが、本稿ではギリシア語表記で統一した。
 - 22) Horton, *Child Jesus*, Pl. 83. 挿絵は15世紀フランスの写本から。

- 23) Elliott, *op. cit.*, pp. 82-83; Ehrman, *op. cit.*, pp. 27-28. エリオットの英訳はティッシェンドルフ編の14世紀のラテン語写本に基づいているが、エールマンの英訳は、ティッシェンドルフの版以後に発見され、1927年の Armand Delatte によって出版された15世紀のギリシア語写本に基づいている。
- 24) 補足しておこう。ローマ時代以来、一般人を対象にした学校は商店と並んで街路に面して建っており、通りとは「帳」一枚で仕切られていた。アウグスティヌス (Aurelius Augustinus, 354-430) は『告白』第1巻第13章で、文法学校の「帳」は誤りを隠すためのシンボルでしかなかったと述べている。ちなみに、学校教師は授業料で生計を立てているため、誰もが授業を見ることができるよう帳は通常開けられていた。アンブロージョ・ロレンツェッティ (Ambrogio Lorenzetti, c. 1290-1348) がシエナの Palazzo Pubblico の「平和の間」に描いた「善政のアレゴリーの効果」(1337-40年)には、靴屋や乾物屋と軒を同じくした学校の授業風景が描かれている。
- 25) Cullmann, *op. cit.*, p. 406 & Elliott, *op. cit.*, p. 85.
- 26) Elliott, *op. cit.*, p. 85.
- 27) Cullmann, *op. cit.*, p. 406
- 28) Elliott, *op. cit.*, p. 84 & 86.
- 29) *The Holkham Bible: A Facsimile [Illustrated]*, The British Library, Michelle P. Brown (Author), 2007.
- 30) 8枚のトリング・タイル Tring-Tiles が現在大英博物館に収蔵されている。トリング・タイルに関する最新の研究成果は以下の書に見られる。Mary F. Casey, "The Fourteenth-Century Tring Tiles: A Fresh Look at Their Origin and the Hebraic Aspects of the Child Jesus' Actions," *Peregrinations*, vol. 2, Issue 2, 2007, pp. 1-53.
- 31) *The Infancy of Our Lord*, Seldun Supra MS 38, SC 3426, from the Bodleian Library, Oxford. Notes written by Dr. W.O. Hassall, Publication no. C00520. (<http://www.microform.co.uk/guides/C00520.pdf>) この作品は1300年頃にアングロ・ノルマン語で書かれた幼時福音書のフランス語版で、現存するもっとも完全な彩飾写本 (1320-30年頃) と言われている。
- 32) *The Holkham Bible*, fol. 16. アラビア語版は子どもたちをオーヴンに隠したのは母親たちと記しているが、『ホルカム聖書』では父親が描かれる。これはトリング・タイルや時祷書の挿絵でも同様である。
- 33) 八木、「概説」、『聖書外典偽典 第6巻』1976年、118頁。
- 34) 八木、「解説」、『新約聖書外典』1997年、477頁。幼時福音書を奇跡集として見る認識には、幼児イエスの行いを気まぐれで破壊的であると規定して、彼を“恐るべき子ども”とみなすイエス観も伴っていた。八木氏も、「イエスらしさなどほとんどない、悪魔的で高慢な少年」のイメージで捉えている (476頁)。

- 35) Chartrand-Burke, *op. cit.*, 2003, pp. 144-145.
- 36) 筆者は学校教師との対立をイエスの成長のモーメントとしたが、Mary C. Dzon は、幼時福音書がイエスを悪童《a wanton boy》として描いたことそれ自体に意味を求めて、以下の点を強調する。ひとつは、イエスの幼時物語の作者たちは、キリストの生涯には不完全ではあるが子ども時代というひとつの段階があり、イエスはそこから徐々に成長して完全な人間になったことを示すことで、読者・聴衆がキリストの人間性を見失わないようにしたこと。そしてもうひとつは、中世の神学者や作家たちは、躰を必要とする《wantonness》を子どもの本質的な特徴として認識していたということ。後者は中世の子ども観の一端を表している。Mary Christine Dzon, *The Image of the Wanton Christ-Child in the Apocryphal Infancy Legends of Late Medieval England*, U. of Toronto, Ph. D diss., 2004, pp. 302-303.
- 37) 幼時福音書の反ユダヤ主義に言及しているのは、Ayers Bagley (1985); Evelyn Birge Vitz (2001); Mary Christine Dzon (2004); Mary F. Casey (2007)。中世キリスト教の反ユダヤ主義については以下の書を参照。Albrecht Classen, *Childhood in the Middle Ages and the Renaissance: the results of a paradigm shift in the history of mentality*, W. de Gruyter, 2005; Maureen Boulton, "Anti-Jewish Attitudes in Anglo-Norman Texts Twelfth and Thirteenth Centuries," *Christian attitudes toward the Jews in the Middle Ages: a casebook* / edited by Michael Frassetto. (Routledge medieval casebooks; v. 37) , 2007.
- 38) Ivan G. Marcus, *Rituals of Childhood: Jewish Acculturation in Medieval Europe*, New Haven: Yale University Press, 1996. see Chapter 3. Ancient Jewish Pedagogy.
- 39) *ibid*, p. 39.